

## 生き残った糸数さんの想いに触れよう！！

糸数禧子(昭和4年生)

〈列車爆発 日本軍の駐屯 学徒隊 南部避難 収容所 軍政府〉

### ■配給所(はいきゅうじょ)になったわが家

戦前、私の家は糸数商店というお店を営んでいた。戦争が始まってからは物品が統制され、糸数商店が配給所になった。タバコや塩は専売で、反物や靴、鍋類など、あらゆる商品がうちに来ていた。家は瓦屋の2階建て、63坪と比較的大きく、兄が東京の大学、姉は東京の洋裁学校に通っていて、貧しい生活はしなかった。私は私立昭和女学校に通っていた。

### ■列車爆発の被害に遭う

日本軍が沖縄に駐屯し始めて以来、軽便(ケービン)鉄道は兵隊が使用するようになり民間人は乗車できなくなっていたが、学生は特別に許可されていた。

〈中略〉列車は荷物があまりに重いので、自転車ぐらいの速さでとても遅かった。そして、神里集落(現 南風原町)の近く(稲嶺駅の手前で平坦な場所だったと思うが、記憶が曖昧である)まで来た時に列車が爆発した。当時は燃料が石炭で、列車の煙突から煙と一緒に上がった火の粉がガソリンに引火したようだった。私は2両目から外を見ていたので、火がついた瞬間を見た。2両目の屋根の上に5、6人兵隊がいたがみんな飛び降りた。

私もすぐに飛び降りた。1人の友人は気が動転し、燃えている列車の方に走っていきこうとしたので、引っ張って一緒に後ろの方に逃げた。その時には草も全部燃えていた。私の髪の毛は焼け、両手もただれるほど火傷をしてしまった。

〈中略〉神里にいた兵隊2人が、溝に落ちていた私ともう1人を担いで丘の上にあった銭又(ぜにまた)の1軒家まで運んでくれた。すでにけがをした兵隊5、6人が横たわり、ワーワーワー叫んでいた。ヤギが焼かれた時のように手も足も真っ黒に焼けて顔の皮も焼けただけ、あれは地獄だった。私の手も皮が焼けてたれていた。そこからトラックで南風原村(現 南風原町)の陸軍病院に運ばれた。そこに運ばれた兵隊たちはみんな瀕死(ひんし)状態で「殺してくれー、殺してくれー」と叫んでいた。焼け焦げた

1人の人は「寒いよー、寒いよー」と言っていた。「地獄というのはこういうものかな」と思った。

私は一週間ほどで退院した。包帯を巻いて目取真<sup>めどるま</sup>に帰ったが、私の家を借りていた中隊長に頼んだら衛生兵(池山ヨシオという名前だったと思う)を呼んでくれ、1ヵ月ほど2、3日越しに来てくれた。火傷がひどくて薬が効かないため、薬の入った洗面器に患部をつけていたが、それがものすごく痛くて毎日泣いていた。私がいかに騒ぐので、家を貸してくれていた家主のおばさんは困っていたようだった。

一緒に乗っていた同級生1人や車掌<sup>しゃしょう</sup>さんも亡くなった。亡くなった同級生は私のすぐ目の前に乗っていた。初めは一緒に列車の外側に身を乗り出していたが、知らない男性から中に入るように言われて彼女は内側に入った。彼女は足が速かったが、内側にいたために逃げ遅れてしまったと思う。のちに、彼女の服(服に名前を書いていた)が爆発で木の上に引っかかっていたと聞いた。別の学校の女学生たちも、列車の後ろの方を向いて乗っていたため逃げ遅れてしまったかもしれない。私は列車の外側に身を乗り出して前方を見ていて、炎が上がり兵士たちが飛び降りるのが見えたので助かった。

事故の翌日、列車に犠牲になった方々の肉片がいっぱい積まれて行ったと聞いた。バラバラになった肉片や衣服の切れ端があちこちに落ちていたり、引っかかっていたりしていた。爆発音はとても遠くまで聞こえたらしい。

日本兵は畑やキビ畑に爆弾を隠していたようだが、この事故のあとに移動させていた。

〈中略〉

#### ■梯梧学徒隊として野戦病院へ

沖縄戦が始まると、私は梯梧<sup>ていご</sup>学徒隊(昭和女学校の生徒たちで編成された学徒隊)に動員され、ナゲーラ壕(現 南風原町)に開設された野戦病院で勤務することになった。ナゲーラ壕では首里高女(沖縄県立首里高等女学校)の学徒たちも勤務していた。負傷した兵隊がどんどん入ってきて、便や尿、けがの臭いが漂い、ウジ虫もたくさんいてろくな治療もできなかった。負傷兵は常時200～300人ほどいて看護の人手は足りていなかった。

私たちは包帯の交換や、傷口にわいたウジ虫の除去、排泄物の処理などのお手伝いをした。遺体は、艦砲弾<sup>かんぱうだん</sup>が落ちた穴に兵隊が埋めていた。

ある晩、壕の出入り口で1人の兵隊がみんなに取り囲まれながら、「みんなが死んでも自分は生きて帰るんだ」という話をしていた。その近くには、艦砲射撃でできた穴に雨水がたまってできた池があった。私はそこへ足を洗いにしようとしたが、兵隊の話を聞くため途中で立ち止まった。すると1分もたたないうちにパーツと明るくなって攻撃を受け、みんな一斉に壕に入った。私の隣に立っていた国吉さんという同級生が「手が切れた一手が切れた」と言い、<sup>ぐんそう</sup>軍曹が抱いてすぐ治療室に連れて行っただが、爆弾の破片が肩から心臓に入ったようで10分ほどで亡くなった。話をしていた兵隊もけがを負って一週間後に亡くなった。爆弾は私が足を洗おうとした池に落ちたようで、私の友だちは水をいっぱいかぶり、それが血だと思って大騒ぎしたが無事だった。

#### ■死んだ人が羨ましかった

首里にも<sup>きかんじゅう</sup>機関銃の音が聞こえ始めた頃、第三十二軍の<sup>しらいぶ</sup>司令部が島尻に移動したという話が入ってきた。ある日、壕にいた軍医が「家族のいる人は帰っても良いよ」と言ったので私含め島尻出身の人たちは壕を出た。私が出発した後のことはよく分からないが、国頭方面から来た人たちは残っていたようだった。歩ける負傷兵は一緒に壕を出たが、それ以外の人には注射を打ったという話を聞いた。

私は夜間に南風原を通して大里へ帰った。兄は兵隊に行っていたため、両親、姉、私の4人で避難し、親戚たちと合流して玉城村(現 南城市)<sup>ふなごし</sup>船越の大きな壕に避難した。

はじめのうちは穏やかだったが、ある日誰かが「糸数にアメリカ兵が上って行くのを見た」と言い、糸数と船越はすぐ近くなので壕の中は大騒ぎになった。その後どのように行動するか、親であっても自分の子どもに命令することはできず、「もう自分の思うとおりにしなさい」という感じだった。壕に残ってそこで捕虜になった人もいるし、壕を出て亡くなった人もたくさんいた。

私たちは「家族みんな一緒に逃げよう」ということになり、イージョウ墓という大きな<sup>もんちゅう</sup>門中墓に避難した。その翌日に墓を出て糸満の<sup>まかべ</sup>真壁に向かって逃げた。

ものすごい攻撃の中を家族と一緒に逃げ回る中、負傷してウジ虫がたくさんついた状態<sup>は</sup>で這いずり回る兵隊を見た。人が通った時に見上げていた彼の目つきが忘れられない。みんな自分のことに精一杯で、誰も助けようとしなかった。この光景を見たとき、ふと「この人の家族は今頃どうしているのだろう。子どもがこんな状態になっているとは

分かりもしない。ウジ虫もいっぱいつけて這いずり回っている、それを他人である私が見ているんだね」と思った。このような死に方はしたくないと思っていたが、死体を見ると、どんな死に方でも「ああ羨ましいな」と思うようになった。

ナゲーラ壕でお手伝いをしていた頃、若い中尉がけがで運ばれてきて一週間くらい意識不明の重体だった。その人が目を覚ましたとき、「軍医のやつ、また俺を生かしやがって」と言った。軍国教育を受けていた私は、彼がなぜこのようなことを言うのか当時理解できなかったが、自分自身も避難したことで初めてこの発言の意味が分かった。

〈後略〉

『南城市の沖縄戦 証言編-大里-』31頁～38頁 掲載

○「どんな死に方でも『ああ羨ましいな』と思うようになった」という糸数さんの考えに共感できますか。

- ①共感できる
- ②共感できない
- ③どちらでもない

【理由】